

有害な取り扱ひ方を行つて居ても之を一且母親に注意し更に當事者に注意せしむる手數ありて直接之を支配するの權なきは頗る不都合な次第である。

幼児の眼

△生後五六日になるとラムプの様なキラ／＼する光線に注意するが、物體の見分けが出来るのは生後二週間を要する。

△そして暫くの間は正面の物より外見ることが出来るものである。

△殊に驚く可きは生後四五ヶ月の間は幼児の悉くが斜視であることである。

△眼球に屬する筋肉が充分發達して種々なる方向に眼を向けることが出来るのは三四年を要するを云ふだ。

笑ひ方

文學士 下田次郎

人は笑ふ唯一の動物なりとは、さる學者の人間に下したる定義なり。笑はずとも人間たるに差支なけれど、孰れかといは、人は笑ふ方がよきなり、また實際一生笑はずに居れるものにあらず、然れども其笑ひ方にも様々あり、眞に可笑くて笑ふあり、可笑しくないのを無理に笑ふあり、或は顔の崩れるほどの大笑ひあり一寸した破顔微笑といふもあり、自然の笑ひ、不自然の笑ひ、善意の笑ひ、惡意の笑ひ、と仔細に笑ひの種類性質を研究すれば、中々笑ひなりとて、簡單無造作のものにあらず。

日本人はよく笑ふ人民なり、恐らく世界中一番よく笑ふ人民なり、そは可笑しくて笑ふかといふ

に、可笑しくて笑ふは勿論、可笑しくないのにも
 笑ひ、何ともないにも笑ふ、つまり笑ひは日本人
 の癖なり。その人に應對する有様を見るに、一言
 いふては笑ひ二言いふては笑ふ、殊に婦人の如き
 は、始めから仕舞まで殆んど笑ひ續けといふも過
 言にわらず、尤も追々親しくなれば、本來の自然
 に復して可笑しからねば笑はぬやうになるも、初
 對面同志などは甚だ贅澤にこの笑ひの交換を行ふ
 なり。これは別に大した意味のあるにあらず、幼
 よりの見習ひが、癖となりたるなり。西洋人の日
 本に來りて不思議に思ふその一は、このよく日本
 人の笑ふことなり。この笑ひや甚だ無造作なるが
 如きも、自ら出し方ありて、其呼吸中々容易なら
 ず、恰も洋人の日本語を學ぶに、その「てにをは」
 の用方に困ると一般なり、流石に日本人は生來の

慣れにて、甘く笑ふも、その意味は日本人だけに
 分るにて、他國人にはよく分らず、従て時にはそ
 の笑ひが人を馬鹿にして居るが如く取られて、相
 手の怒りを買ふことあり、例せば長者が眞面目に
 親切に、意見し居る最中に、意見さる、本人が笑
 ひ顔して居ることあり、この笑ひには赤面、納得
 改心、感謝等の意の籠れるなるも日本人の笑ひ方
 を知らざる者には、折角の意見を馬鹿にして居る
 としか見へず、日本人が外國にありて往々しくじ
 る所以の一なり、則ち笑ひにも程度ありて、日本
 人は笑ひ過ぎる方なれば、今少しく笑ひの儉約を
 なさざるべからず。

一體可笑しくないのに笑ふは、不自然なり、日本
 人の笑ひには、此不自然なるもの多し、一日注意
 して笑へる度毎に果して可笑しくて笑へるのか、

お勤めに笑へるかを考へ見れば、自ら此事明かなるべし、元來笑ひは天真爛漫、自然より出で、骨の折れず、愉快なるべき筈なるに、苦勞して作つてまでも笑ふべき必要何處にかある、それも少々ならば愛嬌とも言はるれど、日本人のは愛嬌を過ぎて、殆んど無意味に陥れるものなり。思慮あるものは、猥りに笑はず、よく笑ふものは、安ッばくして、眞目なし。婦人の往々輕々しく見ゆるは下らぬことによく笑ふからなり。日本人の西洋人と應對するを見るに、向ふは泰然として眞面目に構へ居るに反し、此方は分けなしに笑ふて掛るなり、如何にも媚び諛へるが如く見へて、甚だ品格を下げ見苦しきことあり。且可笑しくなきに笑ふより、底氣味悪るく、笑ふても氣はゆるせずとて却て親密なる交際は結ばれざるなり。こうなれば

笑も禍にて、決して笑ふどころにわらず。笑ふも可なり、されど笑は信用の出来る笑ひ方をなすべし。日本人はよく笑ふといはゞ、唯笑ふ一方かといふに、左にわらず、笑ふべからざるに笑ふと共に、また笑ふべき所に笑はざるの癖あり、其自然に反するは即ち一なり。此方は容赦に過ぐるより來れるものにて、殊に婦人に多きやうなり。例へば會などありて、無邪氣に笑ふべき場合にも、魚の如く黙つて居るより、座が白けて、仕舞ひまで肩を凝らして居ることあり。則ち日本人は大に笑ふこともせず、又大に眞面目なることも能はずして、其中程の年中エンリク笑ひ居る人民也。日本では互故此事に氣付かざるも、外國に出て外人と交際するに及んで、日本人の笑ひ方には一風あり

改良を要すべきものあるを覺ゆるなり。今や春風
 駘蕩草木禽鳥皆笑ふの候、日本人の笑ひ方に就て
 一言し、其反省を求むる亦時を得たりといふべき
 か。

貞一の日記

(承前) (明治廿六年)
 (拔萃) (五月生男兒)

そのの母

三月廿八日 今日千葉より、筒井の伯父さん、御
 出になりしも、例の如く、はにかむ、
 道にて、余り親しくなき人に、貞チャンと呼ば
 れる時は、誠に澁りたる顔して、ジツト下を向
 いて、「イヤ〜」といふ。
 夕方、父に抱かれながら、上野のバーサンきた
 ないと、繰りかへしいふ、この日曜日に見たる
 乞食の老婆の事なり。また大きくなつたからつ

ま喰べやうといつて、足をつまだて、背伸びす、
 これは何日かお刺身のつまを、喰べやうとした
 時、これは大きくなつたら、喰べるものと、云
 ひさかせしを覺え居りしなり。

父の額を指して、オツムのボンボといふ、前
 も、自分の足の甲を、アンヨのオセナカ、又足
 の裏を、アンヨのボンボなどいへり。

三月卅一日 晝食後、朝來の風風きて、氣候も暖
 かなり、「ドツカヘユキマシヨ〜」と繰り返して
 せがむ儘に、父と電車にて日比谷公園に向ふ、
 昌平橋に至りて、船を見るや、「オフネ〜」とよ
 びて、「オフチガギツチラコ」と大きな聲で得意
 になりて唱ふ、神田橋に到りて、外濠線の電車
 を見るや、又大聲にて「御茶水電車」とよび、又
 「電車が鬼でござして居る」などいふ。公園に行